

近世の紀行文にみる嵯峨野における 風景の重層性に関する研究

山口 敬太¹・出村 嘉史²・川崎 雅史³・樋口 忠彦⁴

¹学生会員 京都大学大学院 工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)
E-mail:Keita.Yamaguchi@t23x1791.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

²正会員 京都大学大学院助教 工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)
E-mail:demu@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学大学院教授 工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂)
E-mail:kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 広島工業大学教授 環境学部地域環境学科 (〒731-5193 広島市佐伯区三宅2-1-1)
E-mail:t.higuchi.wm@it-hiroshima.ac.jp

本研究は、近世の嵯峨野を対象として、紀行文中の風景記述の分析を通じて、1)鑑賞対象、2)風景鑑賞時に主体に想起されている過去の風景表現やイメージ、3)主体の態度や行為、得た印象、を把握することで、嵯峨野における風景鑑賞のあり方を明らかにすることを目的としている。具体的には、眺望や神社仏閣のほか、歌枕・四季の名所の風景、物語・故事の風景、遊びなどの様々な風景記述ごとについて、イメージの追体験、視覚的風景の観賞などの風景鑑賞のあり方とその特徴を示した。その結果、近世の嵯峨野において、地形条件等による景観の多様性と、多様な風景のイメージに合致した景観の状態、さらには多様な風景鑑賞のあり方によって、様々な風景が重層的に生まれていたことを示した。

Key Words : *history of places, scenery, historical landscape, Edo era, Kyoto, Sagano*

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

2008年5月に「地域における歴史的風致の維持および向上に関する法律」が成立し、景観法とあわせて、歴史的な環境資産を活用したまちづくりの支援基盤が整えられつつある。このような動きのなかで、地域の歴史的文化的な風景資産の価値をどのように評価するかという課題が残されている。

風景は主体と環境との相互作用の上に成り立つ現象であるとされる。風景の歴史的文化的価値は、特定の物理的環境のあり方に加えて、それを読み取る主体（人間）側による、特定の「風景の見方」があつてはじめて現れるものである¹⁾。そのため、風景を読み取る主体（人間）側の「見方」の違いによって、様々な異なる風景が現象しうる。このような多義性を有する風景資産を適正に評価するためには、人間が環境から風景をどのように読み取り、評価してきたかという鑑賞者側の「風景の見方」を、丁寧に読み解くことが不可欠であると考える。

近世の嵯峨野においては、京都巡りの一行程として、

愛宕講や開帳、年中行事の際、そして桜や紅葉の季節を中心に、寺院の参詣²⁾を兼ねた名所巡りが盛んであった。嵯峨野の風景は、紀行文から絵画・版画などに、さまざまな形で現れた¹⁾。それら紀行文の風景に関する記述（以下、風景記述とする）からは、視覚的な風景の観賞をはじめ、文学的イメージの追体験や遊びを伴うなど、様々な風景鑑賞のあり方がみられたことが伺い知られる。

そこで本研究では、近世の嵯峨野を対象として、鑑賞者側の風景の「見方」に着目し、紀行文中の風景記述の分析を通じて、1)鑑賞対象（風景の物理的構成要素）、2)風景鑑賞時に想起されている過去の風景表現やイメージ、3)風景鑑賞時の主体の態度や行為、得た印象、を把握することで、嵯峨野における多様な風景鑑賞のあり方を明らかにすることを目的とする。これにより、嵯峨野の風景の重層性を明らかにしたい。

(2) 分析対象

本研究で用いた資料は、江戸時代の紀行文・見聞録のなかから京都について書かれた部分を抄録した『史料京都見聞記』一～三巻²⁾のうち、嵯峨野に関する風景記述

がみられた 22 編の紀行文である（表-1, 2）. 紀行文の筆者は、儒学者や国学者など多方面にわたるが、風景鑑賞のあり方を網羅的に把握するため、これらを同一のものとして扱った. 紀行文の風景記述からは、地誌としての性格が強い案内記の記述に比べて、人々による風景鑑賞のあり方をより詳細に読み取ることができると考えた.

(3) 研究の位置づけ

本研究に関連する先行研究には、1) 江戸時代における人々の風景鑑賞のあり方を論じた研究、2) 嵯峨野の歴史的風土を論じた研究、がある.

1)については、近世・近代の紀行文や名所本などの記述の分析を通じて、名所における鑑賞対象や、人々の風景の認識のあり方とその変化を論じたもの^{3),4),5),6),7)}や、紀行文の記述の分析を通じて景域の構成について論じたもの⁸⁾などがある. 名所の風景について論じた研究は、江戸に関するもの^{9),10)}は多くみられるが、京都に関するもの^{11),12)}は名所本や絵画資料を分析対象としたものはみられるが、紀行文を分析対象としたものは少ない. 本研究は、これらの先行研究の知見をふまえながら、京都の代表的な名所が集積する嵯峨野を対象とし、紀行文の風景記述の分析を通じて、人々の風景鑑賞のあり方の多様性とその要因を明らかにすることで、嵯峨野における風景の固有性とその重層性を明らかにしようとするものである.

2) 嵯峨野の歴史的風土の形成については、文学に表現された風景の特徴について、文学的イメージを重ねる風景鑑賞のあり方について、文学的イメージに合わせた風景の形成や演出がなされたことについては、既に先行研究で指摘されている^{13),14),15),16),17),18)}. 本研究は、これらの見解を踏襲しながら、近世の紀行文の風景記述の分析を通じて、これを精査しているところに意義がある.

2. 研究の方法

(1) 絵図資料を用いた近世の景観の把握

近世の嵯峨野の景観を把握するにあたり、元禄十四年実測大絵図(1701)¹⁹⁾（図-1）と、洛外図（十七世紀半ば）²⁰⁾を用いて、当時の土地利用、名所の立地、道の位置と接続を把握した. 次に、近代の実測地図 1:20000 仮製地形図²¹⁾（1889）を精査した結果、土地利用と道の接続については、近世のものと比較して大きな違いが見られなかったため、地形図の空間情報に、近世の絵図から読み取った土地利用分布と道の接続を重ね合わせて作図を行った（図-2）.

次に、近世・嵯峨野における名所の立地を把握した上

表-1 分析対象とする紀行文

番号	年	日時	紀行・日記名	筆者	紀行、著者に関する注
1	1664	3月28日	所歴日記	石出常軒	旗本で半屋奉行を勤めた家に生まれ、上級武士で、国学者・歌人としても知られる。歴史・伝説を詳細に記しながらの文学紀行であった。
2	1680	9月	近畿歴覧記	黒川道祐	安芸浅野家の儒医であったが、儒学・歴史にも通じ、京に移って、晩年を著作に没頭した。
3	1683	4月	千種日記	未詳	山崎闇斎門下の儒者らしい、在京経験はある。京中京郊の名所旧跡を巡る紀行文は詳細をきわめ、その知識・情報量は膨大であった。
4	1688-1704	秋	嵯峨道之記	陶真軒	公家である。1686には出家した。この紀行文も出家後のものであろうとされる。
5	1697	9月	都の手ふり	浅香山井	加賀藩士であり、歴史・文学に詳しくかった。
6	1704	5月	東遊草	谷重遠	土佐藩士、儒者、山崎闇斎に神道を学んだ。
7	1760		嵯峨野眺望	未詳	(重朝との記述あり)
8	1767	1月21日	京師順見記	未詳	幕府の巡見使に案内役として若狭屋八兵衛・町代の塚本長兵衛・藤井権八の3人が同行した。洛中洛外の寺社調査時の記録。
9	1792	春	思出草	津村涼庵	随筆家と知られる。江戸伝馬町の商家に生まれた。57歳の時、剃髪して隠居、大坂・京などに遊んだ。
10	1816		旅日記	未詳	文中から江戸の商人と推測される。庶民的な視覚で京都を見て廻り、かなり細かく記録した。
11	1817	3月18日	西游紀程	大槻磐溪	磐溪は仙台藩医で蘭学者の大槻玄沢の次男、漢学者。西游紀程は磐溪十七歳の時の滞京交友録。
12	1824	9月23日	上京日記	植松茂岳	本居宣長門下の国学者で尾張藩士。徳川元千代の師範、明倫館の教授にもなった。
13	1831	2月5日	旅のおぼえ	吉村静軒	桑名藩家老静軒吉村吉徳の筆。荷田春満門下の黒田正足から国学と神道を学び、桑名藩に伝えている。最晩年の旅であった。
14	1835	1月21日	筆満可勢	富本繁太夫	繁太夫は江戸豊後節を代表とする江戸深川の芸人であり、旅芸かせぎのため京都に訪れた。
15	1838	4月2日	十国巡覧記	未詳	江戸幕府の諸国巡見使の随行記録。公用観光旅行団である。
16	1839	3月4日	たびまくら	木内啓胤	序によると、主家の養子取の使に随行した。
17	1840-50	1月13日	露の朝顔	横山桂子	桂子は通称みち、月屋と号した歌人。
18	1850	10月10日	綺語文章	西沢一鳳軒	一鳳軒は、歌舞伎脚本、考証随筆を著作。
19	1855	5月15日	西遊草	清河八郎	伊勢詣のため母親と共に西国を巡覧した旅日記。
20	1858	3月24日	花のしづたし	中島広足	国学者・歌人、熊本藩士。本居大平の門人となり、のち長崎に至って諏訪神社の歌会を主宰。当時六十七歳の歌日記。
21	1860	3月25日	雲迺古呂母	中島広足	
22	1861	3月2日	梅桜日記	近藤芳樹	国学者。四十歳の時、大坂に至り、村田春門や本居大平に学ぶ。しはば京・大坂に遊んだ。

表-2 文献ごとの名所の記述の有無

回	名所	文献番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
18	嵐山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	大堰川		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	戸難瀬の滝		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	千鳥ヶ淵		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	天龍寺		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	小督の塚		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	臨川寺		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	法輪寺		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1	大悲閣		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	野宮		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	二尊院		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	往生院(祇王寺)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	定家塚・祇園庵		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	小倉山		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	常寂光寺		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1	落柿舎		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	広沢池		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	大覚寺・大沢池		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1	清涼寺(釈迦堂)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
1	直指庵		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

で、分析対象とした 22 編の紀行文から名所巡りの順路を読み取り、名所の訪問回数と道の通行量を単純集計して、作成した地図上の道に重ねて作図した（図-3）. 紀行文中の風景記述の記述回数を名所ごとに整理したものが表-2 である. 各名所に関する風景記述の量は、江戸時代を通じて目立った偏りは見られなかった. ただし、

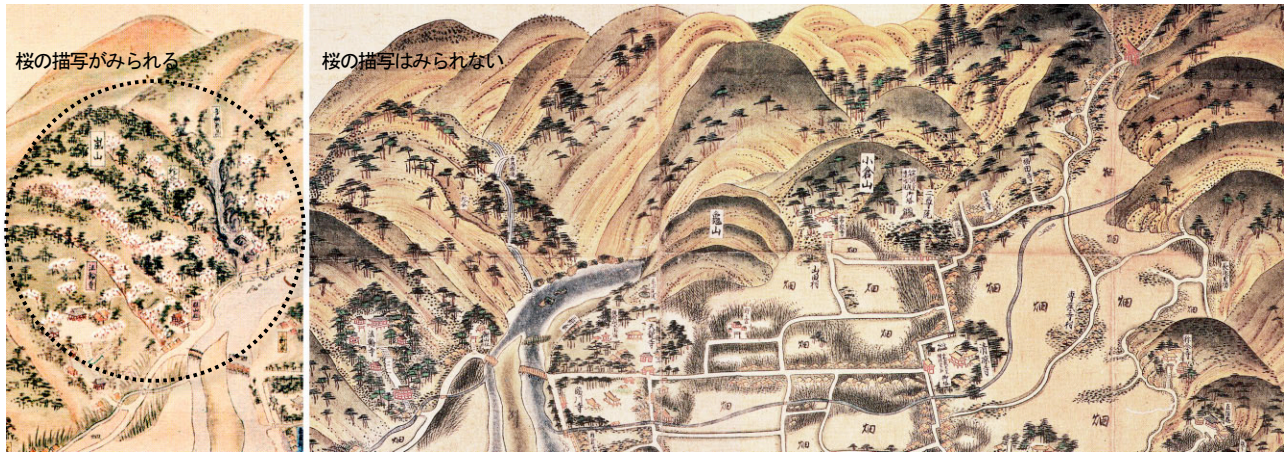


図-1 絵図に描かれた嵯峨野の景観 (左図：天明六年(1786)京都洛中洛外絵図，右図：元禄14年(1701)実測大絵図，天地は東西)

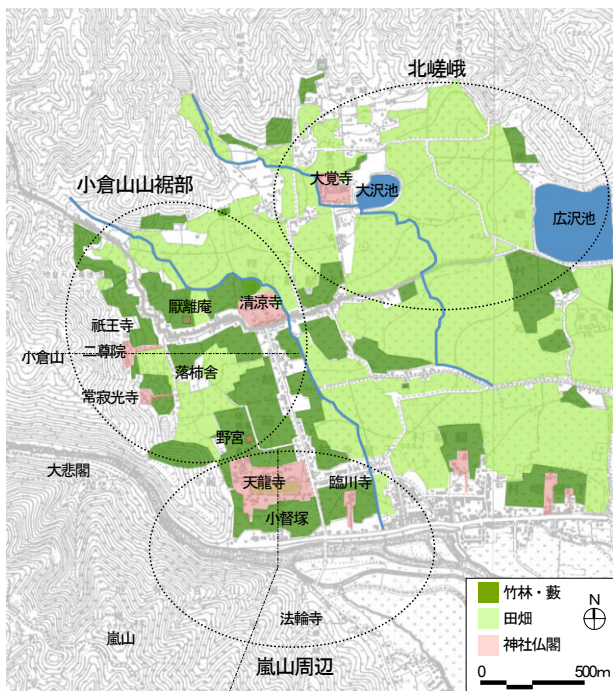


図-2 近世後期～近代初期の嵯峨野の土地利用

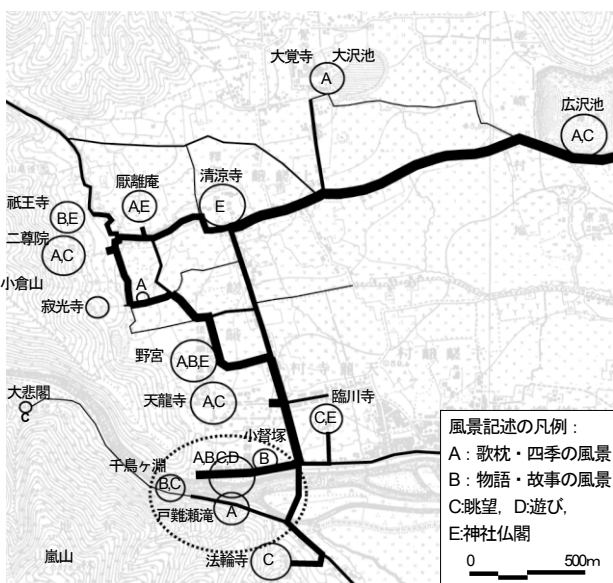


図-3 名所巡りの経路と風景記述の分布

注) 風景記述の分類は表-3に対応する。
実線線の大きさは各名所の訪問回数，線の太さは通行量を表す。

訪問回数の多い大寺院であっても，その風景記述は乏しい場合がみられるなど，名所の訪問回数と風景の記述量の間には比例関係は見られなかった。

本論では，嵯峨野の名所群を，その分布密度と周囲の地形条件により3つの領域に分けて考察する。それは，1) 嵐山・大堰川に近接する名所群の領域，2) 小倉山の山裾部に位置する名所群の領域，3) 北嵯峨の田畠地帯に位置する名所群の領域である(図-2)。

(2) 記述内容の分類

紀行文の風景記述を分析対象として，人々の風景鑑賞のあり方を把握するにあたり，まず，近世以前にみられる「風景の型」についての先行研究を再整理し，それらの知見をふまえて記述内容の整理を行った。

風景という現象は，その個々の現象に共通した類別可能な一定の形式を有していること，すなわち風景は「型」をもつことを，先行研究は指摘している。樋口は，代表的な風景の型として「歌枕の風景」や「八景型風景」を挙げ，前者は地名と景物，固有の情緒によって，後者は場所・空間と景物によって成るものとする²³⁾。同じく阿部は「和歌」，「屏風絵・庭園・洲浜」，「物語」の風景を挙げる²³⁾。奥野は「やまと言葉の歌枕の風景」，「漢詩・漢文的な典型的風景」を挙げる^{24), ③)}。

また，羽生による江戸の名所に関する先行研究では，近世の名所記や紀行文にみられる記述の内容を，「地理情報」，「歴史・伝承・由来等」，「年中行事・四季の景物」，「物理的構成要素(建造物，樹木，旧跡など)」，「情景(眺望・来訪者の様子)」などに分類し整理している²⁵⁾。

これらの知見を参照し，本論では，紀行文中の風景記述を，鑑賞対象およびそれに関連するイメージの性質の違いにより，A「歌枕・四季の名所の風景」，B「物語・故事の風景」，C「眺望」，D「遊び」，E「神社仏閣」の5つに分類し，名所ごとに記述を整理した(表-3，次頁)。

表-3 紀行文中にみる嵯峨野の風景に関する記述

凡例 風景の型 ... A:歌枕・四季の名所の風景, B:物語・故事の風景, C:眺望, D:遊び, E:神社仏閣
風景鑑賞のあり方 ... I.イメージの追体験, II.視覚的風景の観賞, III.遊び

名所	型	鑑賞対象と想起する文学	紀行文中の風景記述
嵐山周辺			
嵐山	A	桜, 紅葉	「あらし山をみる, 山も川もふりにし名ところ, あかすおほゆるは此わたりなりけり(I).」(『思出草』,1792) 「あらし山の花みむとまかりしに, をちこち人の群行さま, げに花の都ぞかし(I).」(『露の朝顔』,1840-50)
	C D	山の峰, 松, 梢, 山桜, 水面の反射 茶店, 酒, 群衆	「嵯峨にてうれしきもの, 広沢の池とあらし山なり. 広沢は佳景なり, 嵐山は絶景にて待る(II).」(『騷族漫録』,1802) 「嵯峨を過ぎれば, 則ち嵐山全く現す. 蓋し其の境たる, 峰巒秀出, 万松蒼翠たり. 一水潺湲(せんかん)として其の下をめぐる. 此れ其の大勢なり. 而して山桜争い発し, 濃淡綺錯す. 其の高きものは長松の翠を帯び, 低きものは影を清流に倒す. 紅緑相映じ, 粧点趣を成す. 譬えば猶お天生の佳人, 衆美皆な具して, これを飾るに脂粉を以てするがごとし. むべなり古今艶称して以て一名区となること(II). 予や此の境に夢寐(むび)すること殆ど十余年, 今にして豁然(かつぜん)心目を醒ます. 亦た快ならずや. 遂に峡口の旗竿に投じ, 觴(さかずき)を引き満酌す. 頽然として既に酔う(III).」(『西游紀程』,1817) 「(天竜寺)寺を出れば則ち嵐山なり. 山花紅裡し, 輕輕動かんと思ふ. 微風これに触れ, 飄片雨下し, 一帯の流水, 雪を泛(うか)べて以て去る. 亦た一種の奇観なり(II). (中略)太平の景象, 心目に恍然たり(II).」(『西游紀程』,1817) 「嵐山にいたる. 桜の名所にて川の向ふ一面の山桜, 花時の景色筆舌の及所にあらず(II). 此方には茶店四, 五軒ありて, 塵気を絶し仙郷のをもあり, 則ち亭にいこひ酒肴を命する(III). (中略)山水を対手として数盃をかたむけ, 優游晩昏に及, 恋々として茶居をいつ(III).」(『西遊草』,1855) 「大井川のこなたの岸ねなる, かり屋の間をかりて花見る所に定めたり. さて川づらに打出たるに, 松のひまひまさきたる花どもの今を盛なるが, 水を隔てて山たかく見あげられたるさま, まことにいはんかたなく, おとに聞つつおもひやりしは, ものにもあらざりけり(II).」(『花のしづたし』,1858)
大堰川	A	月, 筏, 紅葉, 河鹿, 和歌(定家, 朝臣)	暫く, 河辺に徘徊す, 程なく月東山より出て, 殊に清明なり(II). ...特に小倉山之名月, 又逢事期し難し, 深夜寝ずして之を眺む(I). (『近畿歴覧記』,1680) 「定家卿の歌に, 『大井川かはらぬいせきおのれさへ夏きにけりと衣ほすなり』とありしことを思ひ出て(I), “大井川いせきの波も秋かけてよるよる月に衣ほすなり”(『嵯峨野眺望』,1760)
	B	詩歌, 御幸, 三船遊, 『平家物語』『横笛』, 「小督」, 『本朝続文粹』	「貫之は醍醐の御供して河辺の松に事をとひ, 大宮右大臣は白河の御気色をあふきて, 古き御幸のなかれをしたひ, 公任卿は三の舟をまねきなどして, 妙なる言葉多くとまりし所なれば, 是かれをす(誦)し返し, 河のなかれ, 山のたたすまひにおもひ合わすれば猶おもしろし(I)」(『滝口におもひ捨てられて, 横笛の身をしづめし千鳥か淵はこれにやと筏士にとひければ, 小督のしづみしもそなれば, 小督か淵とも云とむおしへける(II). 戸難瀬の滝に身をなけてはやくと人と空仁法師のよみしは, 此二女の事かかなへ(並)ていひけるやうになむ有ける.」(『所歴日記』,1664) 「続文粹に天下の勝地は大堰川に過ぎたるはなし, 城中の名区は嵯峨野にしくはあらず, とあるも宜(むべ)なり(I). (中略)水の色藍よりも青く, 嵐山の樹々紅葉して色を交へ, 下す筏有り釣垂る有り, 絶景言語に尽させず(II).」(『綺語文章』,1850)
	C	水の流れ, 漁夫, 渡月橋, 東山, 嵐山	河辺に出て舟よそひし, 久方の中なる川さくすはと, 斜輝波をひたし, 水光天にまはる心ちするに, 鳥鷺(ねぐら)に帰る風景すらも名残つきせぬかへるさなり(II). (『嵯峨道之記』,1688~1704) 「此茶や南に向, 前に大井川滝なりておつ, 白流雪のことし. 向に嵐山之峰そはたり. 東山川下に見へたり. 無双の景趣(II), 酒後前の川に出て川あみし, 遊戯三昧老をわする熊なり(III).」(『東遊草』,1704)
	D	酒・料理, 音楽, 川下り	「前の川にてあゆとらせ, なますにいとなみ多くひたる, たくいなき興なり(III).」(『東遊草』,1704) 「さて大井川のほとりに出て, 酒のみなとす, いと興あり(III).」(『上京日記』,1824) 「然に此河へ堂上方舟を出し天幕廻りに緞帳を張り中にて楽を奏, 何おふ(名におふ)嵐山大井誠に雲上なり(III).」(『筆満可勢』,1835) (保津川の川下り)「岸たかきいはむらのただすまひ, 見るめはいとおもしろけれど, 心はおちみず(II). (中略)人々河原におりみて酒のみものくひつつ久しくあそびて, 又も其舟にのりてくだる(III).」(『花のしづたし』,1858)
戸難瀬滝	A	和歌(俊成, 忠岑), 桜, 筏, 流れる葉	「山のなかには斗にいとさきやかなる流れあり, こは戸無瀬の滝といへると聞て, “絶す落る戸無せの滝は山の名のあらしとともに世にひびくなり”.」(『露の朝顔』,1840-50) 「嵐山に落る戸難瀬の滝を見る. (中略)玉葉に俊成の詠, “となせより流す錦は大井川筏につめる木の葉なりけり”. 拾遺に忠岑歌, “いろいろの木葉流る大井川下は桂の紅葉とや見ん”. 何れも古詠眼前にあり(I).」(『綺語文章』,1850)
千鳥ヶ淵	B	平家「横笛」	「千鳥ヶ淵は横笛が溺死せし哀れを伝ふ. 是和歌者流の府にして詩客風騷の地なり(I).」(『十国巡覧記』,1838)
	C	淵, 岩	「嵐山の翠, 千鳥ヶ淵と云, 水青みて物凄き風情なり(II). 此頃の降続たる山水にて水せき落て, 千鳥ヶ淵の岩も頂のみ少ばかり見へたり.」(『京師順見記』,1767)
天龍寺	A	桜	「(檀林寺の跡)今の天竜寺なり. 其後あれはてつるを疎石のすすめによりて源尊氏再興して疎石を開山とす. 花はなけきの色もなしとおしみ給ひし桜は, 此寺にや有つらんと, むかしおもはれて, いとおもしろし(I).」(『所歴日記』,1664)
	C	嵐山・亀山, 庭	「寺の後, 嵐山・亀山並ひて見へる(中略)山を請て自らの松樹木末をならへて景色よろし(II).」(『京師順見記』,1767)
小督塚	B	平家物語「小督」, 小督庵跡, 塚, 楓, 桜和歌(俊頼)	「しのぶむかしの柁住居, 琴の音かよふ松風に, いまぞ哀を謡曲のたへなるに留む(I).」(『十国巡覧記』,1838) 「小督の塚は橋詰の敷中に有るを尋ね, 彼の高倉院の勅を受け, 彈正仲国明月に鞭を打つて琴の音を慕ひ御文を渡せし平語を思ひ出(I)」(『綺語文章』,1850) 「大井川の右の方いと広く竹垣ゆひめくらせる敷の中に, 小督・仲国のおくつきといへる有, こは昔いともかしこき大内につかへし人と聞つるに, 世をそむきて後此野辺の露としも消つるにや, いと哀になむ(I). “”古への其糸竹のしらへまで思ひあわせて過るさか野路”.」(『露の朝顔』,1840-50)
臨川寺	C	眺望	「大井川の際に臨川寺と云あり. 松の中道行く. 見わたせは河つつもめはるにて気色いとよし(II).」(『所歴日記』,1664)
	E	境内, 築山	「此寺景よく塙静なり, 遊人もなし(II), 寺僧一人方丈に手習なとしてつれつれなるあり様なり.」(『東遊草』,1704) 「庭の築山, 僧舎の景よし(II).」(『十国巡覧記』,1838)
法輪寺	C	俯瞰景	「庭に法輪桜二本有り, 此座敷より双の岡・大井川・轟橋・渡月橋眼下に見へ, 絶景なり(II).」(『京師順見記』,1767)
大悲閣	C	俯瞰景	「千光寺の跡なり, 其の景象, 筆舌の及ぶ所に非ず(II).」(『近畿歴覧記』,1680)
小倉山山裾部			
野宮	A	和歌(源順, 藤原公経, 斎宮女御)	「源順ここにきてよめるうたに, “たのものしな大宮人のうふるきくしぐるる秋にあへすなりとも”, 続古今, 入道前太政大臣, “櫛さすしはのかきほのかすかすになをかけそふる雪の白ゆふ.”, 又斎宮女御此所にてよませ給ひける歌に, “ことのねにみねの松風かよふらしいつれのをよりしらへ初(そめ)けん”.」(『千種日記』,1683)

野宮	B	源氏物語「賢木」、黒木の鳥居、小柴垣	「野の宮に行て見れば森の中になつかなるほこらあり。黒木の鳥居のみむかしを残す形見にて、その跡とも見えす、源順か、たのもしきものにいひし草は絶けるにやなし、物の音にまかひけん、松風のみさひしくすみ渡るをききて、“琴の音にむかしかよひし松風や袖引返す野の宮のおく”、光源氏の香をなつかしみとよみて(I)」「『所歴日記』,1664) 「しけるたるもの内に御みやあり。黒木の鳥居、小柴垣などなをのこれり。まことや、賢木の巻にも、物はかなげなるこしばを大垣にて、板屋ともあたりたりとかりそめなめり、黒木の鳥居どもはさすがにいと神々しう見わたされてとかけり。御みやのまへのやぶのうちに、ついひちの跡など所々みゆる(I)。」(『千種日記』,1683) 「野宮のやしろにまうて見侍るに、誠によあるさまにて、かたはかりなる小柴垣・黒木の鳥居も苔むし、いといと感情あまりあるままに、“野宮の余波もはかな小柴垣さすか残るもむかしへたてて”(II)」「『嵯峨道之記』,1688-1704) 「此宮いと淋しけにて黒木の華表(鳥居)・小柴垣ときさきよりもあはれになん。(I)」「『旅のおぼえ』,1831)
	E	宮、黒木の鳥居、小柴垣	「寅卯の間に向、黒木鳥井伊勢と同じき立様なり。小柴かき物ふりたり。(II)」「『東遊草』,1704) 「竹生たる処を三、四丁行に、野の宮とていふりたる宮あり、小柴垣結めくらし、黒木の鳥居のさまいと物さひたり(II)。」(『露の朝顔』,1840~50) 「野の宮は黒木の鳥居・小柴垣、いにしへ伊勢太神宮へ齋宮に立せ給ふ内親王の住給ひし遺風とて、古雅なる事いはん方なし(II)。」(『綺語文章』,1850)
二尊院・小倉山	A	和歌(定家、公雄、貞信) 紅葉、軒端松、楓、寛の音、鹿の声 (E:定家山荘跡)	「定家卿山荘の跡とて二尊院の内にあり。なれて久しきとなかめ給ひし軒端の松、けにしのはぬにやあるらん、今はその跡さへたしかならず、権中納言公雄卿おもひ、小倉の山水のいかにすれはとよみてすますなりぬる跡は猶知人なし、貞信公の心あらはといさめ給ひし紅葉も秋ならねは其色をあらわさす(I)。」(『所歴日記』,1664) 「溪関に寛の音絶えず、鹿の声時々聞ゆ、都にて閑馴さる事にて、最興あり(II)。」(『近畿歴覧記』,1680) 「この所(嵐山)よりをくら山もほど近きよききて、いといいにしへの跡なつかしく尋入て、定家卿の山荘のむかし朝な朝たと詠せられ、軒はの松そなれて久しき、など詠をかれしも情深く覚へ侍り。“小くら山きのふはとみし言のはもしくることの面影にして”。“忍はれん軒はは見へす小くら山ふりぬる松の残るあはれさ”(I)。」(『嵯峨道之記』,1688-1704) 「山は皆楓の木ともいとおほし、今弥生の半なればやうやう春めくもいとゆかしく、おのつから秋おもほゆる斗になむ(II)。(中略)猶いこふほど、目もはるけき山々画に書たらむかこく、えもいはぬけしきにまたなき心ちそせられける(II)。」、「山の頂に至るに、けに時雨の亭の名残にやとおもう斗、かたはかりなる亭の残れるもいとおかしくおほえける(I)。(中略)“をくら山思ひ入てそ中々にみぬ古しへの忍はれにける(I)”。」(『露の朝顔』,1840-50)
	C	連山、俯瞰景(嵯峨野、都)	「(小倉山)折節月色清明なり、座上より東南の連山目前に見ゆ。」(『近畿歴覧記』,1680) 「山上にある稲荷の社、大師の廟などにのほまは、都のかた見えてよきところなり(II)。」(『思出草』,1792) 「山の頂には定家卿の旧跡を留む、今も時雨の亭とて、あやしの四阿屋を置く、所謂小倉の山荘とは是なりといふ。嵯峨野一円を眺望に備ふ(II)。紅葉の多きは貞信公の和歌を以てしるへし。」(『十国巡覧記』,1838)
往生院・祇王寺	B	平家物語「祇王」、「横笛」庵の跡	「妓王か色をいといひて籠りし往生院に至る。往て生る舎りと御門のなかめ給ひしは此寺や(I)」「『所歴日記』,1664) 「釈迦堂のかなたより右に行て、しげりたるやぶのうちに祇王寺あり。(中略)もえ出るも枯るもおなじ野辺のくさのみ生ひしけるふるつかとも、あはれもふかうおもひたるとに(II)」「(『千種日記』,1683) 「二尊院にまうて、それより往生院にいたる。世の人は妓王寺といへり。妓王・妓女はらからの墓、母刀自・仏の墓などうしろの山にあり。彼よみける歌をおもひ出るに哀も一かたならず、かかる所におもひ入けんほとくなくおほゆ(II)。今も猶尼てらにてあり。“誰もみな秋にはもれぬことのはをかけつつしのふ袖そ露けき”。」(『思出草』,1792) 「萌出るも枯るも同じと、造化の理を悟り、綾の錦の粧ひも、まとをに織れる藤衣に替りて、世を捨る草の庵、道心堅固にすましたりと平家物語に哀の跡を留む(I)」「(『十国巡覧記』,1838)
	E	石塔、木像	「妓王寺も浄土宗にして、よふやく藁屋根の小堂のみ。本尊は阿弥陀仏にして脇士は観音勢至なり。清盛入道浄海の像・円光大師の像を後にすへて、祇王刀自を上段に居え、祇女仏の木造は下段に置きたり。」(『綺語文章』,1850)
定家塚・厭離庵	A	和歌(定家)	「時雨の亭は彼卿の多く時雨を小倉山に詠給へる歌あるに因て、後人設る所なるへし。続拾遺集に、“いづはりのなき世なりせは神無月誰かまことより時雨そめけん”。新古今に、“小倉山時雨のころの朝な朝な昨日はうすき四方のみち葉”。杯の句にて、謡曲にも綴(つづり)出たり。」(『十国巡覧記』,1838)
	E	定家山荘(時雨亭)跡、柳の水(井戸)、定家と為家の塚	「厭離庵は尼僧住せり。定家卿小倉の山荘の跡なり。卿の墓は寺後に小き五輪塔有。為家卿の墓は門外敷の中に、石の井垣して木を植たり。しぐれのちんの跡もあり。誠かんせいの地なり(II)。」(『旅日記』,1816) 「厭離庵といへるありて、其中に定家卿のおくつき有とをしふるにまかせおとなひけるに、内より尼立出て、案内す。入てみればいとふりたるおくつきなり、かたへに柳の水と名つけし井戸有、めくり草いたくしけりたるいとあはれにて、“幾とせをふるゐの水も青柳の名にしおへはか緑にそみゆ”(II)。」(『露の朝顔』,1840-50)
落柿舎	A	俳句(去来、梅室、大江丸)、去来の庵	「小倉山下山本町落柿舎を訪ふ。蕉翁の十哲にして、“柿ぬしや木ずゑは近き嵐山”、“五月雨や色紙まくれし壁の跡”、はせを共に石に鐫ぜしは栗津の井上重厚なり。近比梅室雪雄の句に、“され風や柿の木それて嵐山”と云あり、亦去来百回忌、“今もその梢は柿のあらし山”(大江丸)。」(『綺語文章』,1850)
北嵯峨			
広沢池	A	月(名所)	「秋は都人爰(こ)に來りて見はやす月の名所なれば、春なれとも月の比ならは、此池辺に夜をあかすへき物をとおもひて(I)、“おほろけにあらしとおもへは見ぬ月の俤(おもかげ)うかふ広沢の池”。」(『所歴日記』,1664)「大沢より大なり。古歌に多く詠所にて月を見る名所なり。東の山より出る。はしめ池に移(ママ)る月を、池の西より見るへしとなり。扱(さて)こそ今朝は月ならねとも霞にこめし旭の影、池にうつろふ紫微の雲、月の影とも見るべけれ(II)」「(『十国巡覧記』,1838)
	C	眺望池の水面、池辺(汀)山(遍照寺山、愛宕山)水鳥	「広沢の池に至りて見れば、まことに名にあひたる池の西東の山際迄たたへたり、めくり一里も有なむ(I)」「(『所歴日記』,1664) 「水の面はるばると見わたさるるに、鶯(おしどり)鴨など木の葉よりけにうかひぬ。都にめなれぬ面白さにしはらく杖をとめて、“広沢やさそはぬ風の跡みえて落葉を色に浮よをしかも”(II)」「(『嵯峨道之記』,1688~1704) 「汀に茶屋あれば、やすらひつつなかむ。遍照寺山むかひにみえ、あたこ山西にいとちかく池をおほひたるとにそはたち、東は山ひくう月を侍いてんにたよりなき所なり。汀のまこもとりにしけり、水鳥のをりゐるこゑいとしつかに人氣とをきき、世々の人のめてつる名ところもけにたくひなくおほゆ(II)。“影うつる山もみとりの水はれて詠はてなきひろ沢のいけ”。」(『思出草』,1792) 「池の辺も若草も下萌そむる糸遊に、つなぎ留たる春の色、まだ其儘(そのまゝ)の長閑さ(II)にて、」(『十国巡覧記』,1838)
大沢池	A	和歌(公任)、名こそこの滝(滝殿跡)、菊か島、庭湖石	「嵯峨の天皇の離宮のあと、大覚寺に行てみれば、大沢の池は寺の前にあり。池の中島を菊か島と云、一本とおもひし菊をとよみしは、此島に咲けるをなかめけるなるへし。そのかみ、今の事を思ひて、“むかしうへし一本の菊の年を経て花咲秋や大沢のいけ”。公任卿、此所をめてて名こそなかれてとよみ給ひしより、名こそこの滝と云、むかしの滝殿の跡とて、閑院へうつし、残されたる名うつもれて、池の辺にあり、かならず尋ね見るへし、赤染衛門は、あせにけり今たにかかるとよみ、西行法師は、其折迄はむかしなりとなかめし所なりければ、心とまりけれ(I)」「(『所歴日記』,1664)
清涼寺	E	歴史的建造物、定家・為家の古跡	「今見れば釈迦堂極て高大美麗にしてむかしのたぐいにあらず。以前に遊君多く羅綺の袖をつらねたり。」(東遊草』,1704) 「(清涼寺の)境内に嵯峨天皇の御石碑も有之、同所に定家卿の古跡、為家卿の歌塚などあり。このわたり昔しの嵯峨野にて、今は名のみ也とぞ。“若草やふりし嵯峨野のもの語り”(I)。」(『たびまくら』,1839)

(3) 分析項目

次章以降の考察において、風景記述の分析を通じて、人々の風景鑑賞のあり方を把握するにあたり、以下の3つの分析項目を挙げる。

- 1) 鑑賞対象、すなわち風景の物理的構成要素とその組み合わせであり、山や川、特定の景物などにあたる。
 - 2) 風景鑑賞時に想起されている、過去の歌や物語と、そこに現れた風景表現やイメージ。
 - 3) 風景鑑賞時の主体の態度や行為、得た印象。
- これらのうち、3)については、1)イメージの追体験、2) 視覚的風景の観賞、3) 遊び、の3つの典型を挙げ、これらに関連する記述内容を整理した(表-3)。

3. 嵐山周辺における風景記述の特徴

(1) 嵐山周辺の名所の特徴

嵐山と亀山・小倉山に挟まれた天龍寺以南の大堰川沿いには、名所が集中している(図-3)。ここには、和歌の名所のほかに、嵐山を視対象とする名所(天龍寺、臨川寺)と平家物語の旧跡(小督塚、千鳥ヶ淵)が、嵐山山上には俯瞰景を得る名所(法輪寺、大悲閣)がある。大堰川の北岸には、嵐山と大堰川を一望できる地勢を活かして、鎌倉後期には離宮・亀山殿の棧敷殿が設けられ、室町初期には天龍寺の龍門亭という歴史的に重要な視点場が造られていたが、近世中期には茶屋が設けられていた(図-4)。

嵐山については、江戸後期の儒者であり、嵐山についての詩文を集めた『嵐山風雅集²⁶⁾』(1839)の編者であった仁科白谷(1791~1845)が、その序において、嵐山の風景上の特徴を簡潔に表している⁴⁾。仁科は、距離によって山の風景上の性質が変わることを述べ、嵐山が京から近いにも関わらず、まるで遠く山奥へと来たかのように感じるのは、地勢が幽深であるからだとした。また、四時の景物、山と川に近接した高所低所の様々な視点場を挙げた上で、この地がまさに「欲界の仙都」であると述べている。嵐山の風景に対するこのような評価は、近

世後期の儒学者たちの間では、ある程度共通した認識であったと推察できる。

以下の節では、嵐山周辺について、風景の型ごとに、名所の特徴と、風景鑑賞のあり方について考察する。

(2) 歌枕・四季の名所の風景

近世の嵯峨野の名所のうち、おぐらやま、あらしやま、おほみがわ、などは多くの和歌に詠み込まれた著名な歌枕であった⁹⁾。紀行文中の歌枕や四季の名所に関する記述には、古歌の引用や、歌に詠まれた景物がみられた。記述された景物には、大堰川・戸難瀬の滝(詠手：藤原定家、藤原俊成、壬生忠岑)の月、筏、紅葉などがみられた(表-3)。

人々の風景鑑賞の態度に着目して、歌枕・四季の名所に関する風景記述をみると、たとえば、大堰川を眺めた西沢一鳳軒が、俊成の歌(玉葉)「となせより流す錦は大井川筏につめる木の葉なりけり」と忠岑の歌(拾遺)「いろいろの木葉流る大井川下は桂の紅葉とや見ん」を引用し、「何れも古詠眼前にあり」とした²⁷⁾ことから、眼前の景観と古歌のイメージとを重ね合わせる鑑賞主体の態度を読みとることができる。そのほか、をぐら山の月や大堰川の月などについても、古歌の引用とともに、古歌に詠まれた景物を探す、もしくは歌の場面を追体験する態度を読みとることができた(表-3)。また、たとえば定家の歌(大井川かはらぬいせきおのれさへ夏きにけりと衣ほすなり)を連想し自ら詠歌を行う²⁸⁾ように、古歌に重ねて自ら詠歌する態度もみられた。

嵐山の桜が、実際の風景記述として紀行文中に現れたのは、近世後期になってからであり、それまでは夢窓国師の歌の引用のみ²⁹⁾で、その際にも歌に詠まれたものの実際には見られない桜を想起したに過ぎなかった。

『都名所図会』(1780)には、嵯峨野の名所に関して五十首の和歌の引用があり、古歌のイメージは旅人らの風景体験に影響を与え続けていたと考えられる。

(3) 物語・故事の風景

嵐山周辺の名所について、紀行文中に引用された文学

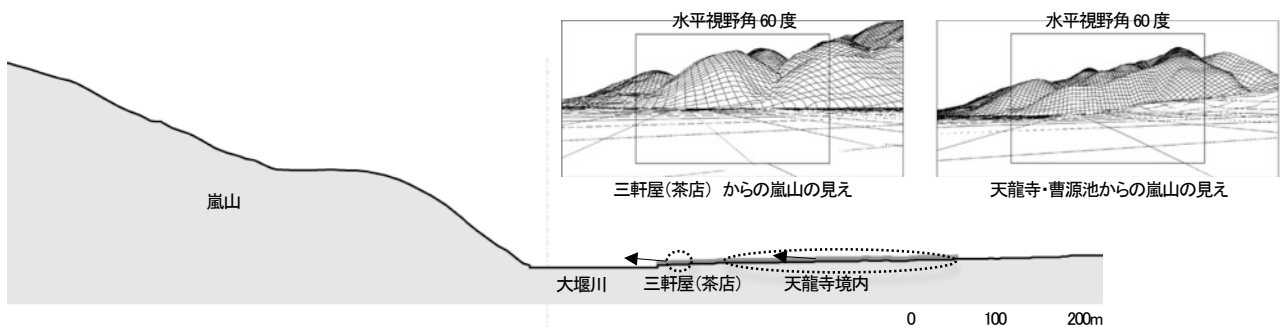


図-4 嵐山・大堰川の断面構成と嵐山の見え方 (断面線は図-2 参照)

作品や故事と、記述された鑑賞対象を抽出すると、大堰川においては、昌泰元年（898）の宇多法皇の大堰川行幸について紀貫之が記した『古今著聞集』の仮名序とそこに描かれた河辺の松や、「世人の美談」としての公任らの三船の遊びの記述がみられた³⁰。そこでの旅人らの風景鑑賞の態度として、たとえば大堰川を訪れた石出常軒は、紀貫之の仮名序の表現や、宇多法皇や白河天皇らの行幸の際の三船の詩歌管弦の遊びを挙げ、「妙なる言葉多くととまりし所なれば、是かれをす（誦）し返し、河のなかれ、山のたたすまひにおもひ合わすれば猶おもしろし³¹」と、文学による風景表現を想起しながら、眼前の山と川の景観と重ね合わせる態度がみられた。

大堰川の千鳥ヶ淵においては、『源平盛衰記』「横笛」の入水と深淵についての記述がみられた。この「水青みて物凄き風情なり³²」とされた千鳥ヶ淵は、「横笛が溺死せし哀れを伝ふ。是和歌者流の府にして詩客風騷の地³³」であり、歌を詠む者の間で『平家物語』「横笛」の詩文を味わい、詩をつくる文芸の中心といえる場所として知られていた。

小督塚においては、『平家物語』「小督」の引用と、物寂びた古塚と周囲の藪についての記述がみられた。小督の塚は「橋詰の藪中に有るを尋ね、彼の高倉院の勅を受け、弾正仲国明月に鞭を打つて琴の音を慕ひ御文を渡せし平語を思ひ出」す場所であり³⁴、「しのぶむかしの侘住居、琴の音かよふ松風に、いまぞ哀を謡曲のたへなるに留む」場所であると認められていた³⁵。

物語・故事の風景に関する記述の特徴として、物語の場面の一部分や象徴的な景物、もしくはその作品名のみを記し、加えて自分の感想を述べる点が挙げられる。

(4) 眺望

a) 鑑賞対象とその印象

眺望に関する記述から抽出した鑑賞対象として、嵐山の山容、松、山桜、大堰川の水の流れや水面、筏、大堰川から見る東山、法輪寺から見た双岡・大堰川・轟橋・渡月橋、天龍寺の庭園からみた嵐山と亀山の眺め、などがみられた。特に嵐山の眺望に関する記述は群を抜いて多く、その内容も充実している（表-3）。『笈埃随筆』には嵐山について「川有り、橋有、山有、野有、花有り、筏有り、月によし、雪によし、納涼によし、四時の壮観尽く極む³⁶」と、一年を通じて眺望に優れた景物に欠かないと評された。

旅人らの得た印象や評価について、嵐山の桜や紅葉、松、大堰川の流れ、筏下す風景は、「古今の絶景³⁷」、「太平の景勝³⁸」と評価され、視覚的満足を与えるものであった。たとえば、漢学者であった大槻磐溪は、春の嵐山を「峰巒秀出、万松蒼翠たり。一水潺湲（せんか



図-5 華洛四季遊戯図巻(一部) (画:円山応挙, 江戸時代)

ん)として其の下をめぐる。此れ其の大勢なり。而して山桜争い発し、濃淡綺錯す。其の高きものは長松の翠を帯び、低きものは影を清流に倒す。紅緑相映じ、粧点趣を成す。」とその景観を写實的に表し、「譬えば猶お天生の佳人、衆美皆な具して、これを飾るに脂粉を以てするがごとし。むべなり古今艶称して以て一名区となること」と絶賛した³⁹。

b) 嵐山周辺の複数の視点場

嵐山を眺める視点場については、「渡月橋を渡り、橋詰より北岸を左へ行く。是を嵐山の勝境とす⁴⁰」という記述に代表されるように、大堰川北岸辺りが良いとされ、実際にいくつかの紀行文に共通して、南方に大堰川の滝、川を挟んだ対岸の嵐山、川下の東山を眺める記述がみられた⁴¹。ここからの眺めは、「此茶や南に向、前に大井川滝なりておつ、白流雪のことし。向に嵐山之峰そはたてり。東山川下に見へたり。無双の景趣⁴²」、「水を隔てて山たかく見あげられたるさま、まことにいはんかたなく⁴³」と評価された。また、岸辺の茶屋で酒を飲みながら遊ぶという行為の記述もみられた⁴⁴。

さらに、花時の嵐山を眺める視点場について、国学者で歌人でもあった中島広足は、1) 大堰川の川岸の仮屋の間、2) 川のほとり、3) 川の水際に置き並べた床、4) 川瀬の舟、の4つの場所を記しており⁴⁵、川辺や水上に多様な遊び場および視点場が生まれていたことが読みとれる。それは「華洛四季遊戯図巻⁴⁶」（図-5、1777年以前）や、川辺に床を並べた光景を描いた『拾遺都名所図会』「大堰川」などの絵図資料からも確認できた。さらに、嵐山を眺める視点場として天竜寺があり、「寺の後、嵐山・亀山並ひて見へる（中略）山を請て自らの松樹木末をならへて景色よろし⁴⁷」と、現在の曹源池の位置辺りと考えられる場所から嵐山と亀山が眺められた。

嵐山周辺には、俯瞰する視点場として、法輪寺と大悲閣（ともに嵐山山上）が挙げられた。法輪寺からは「此座敷より双の岡・大井川・轟橋・渡月橋眼下に見へ、絶景なり⁴⁸」、大悲閣からは「其の景象、筆舌の及ぶ所に非ず⁴⁹」と、山上からの俯瞰景が評価された。

(5) 遊び

紀行文の記述には、風景の鑑賞対象に関する記述に加えて、遊びの行為そのものを賞賛する記述がみられた。それは、主に嵐山に面した大堰川の川岸の茶屋での飲食と、川上での船遊びであった。

大堰川北岸の茶屋においては、「前の川にてあゆとらせ、なますにいとなみ多くくひたる、たくいなき興なり」、「酒後前の川に出て川あみし、遊戯三昧老をわする態なり⁵⁰⁾」という魚捕りに関する記述や、「山水を對手として数盃をかたむけ、優游晩昏に及、恋々として茶居をいつ⁵¹⁾」という飲酒に関する記述に代表されるように、旅人らは山水などの眼前の風景を眺めながら魚捕りや飲食を楽しんだ。

また、「此河へ堂上方舟を出し天幕廻りに緞帳を張り中にて楽を奏、何おふ（名におふ）嵐山大井誠に雲上なり⁵²⁾」とあるように、船遊びや詩歌管弦という遊びもみられた。近世後期の船遊びには、寛政10（1798）年春の皆川淇園らによる三船遊び⁵³⁾のように、平安遷都以来の故事を模したものもみられた⁶⁾。その遊びは屏風にも描かれ（図-6：「大井川舟遊図屏風⁵⁴⁾」）名所案内記『都林泉名勝図会』（1799）には、大堰川における白河院の三船御遊の由緒と挿絵が書かれ、故人の遊びが紹介されていた。

このような飲酒や船遊びをともなう風景嘆賞は「塵気を絶し仙郷をもひあり⁵⁵⁾」という記述に代表されるような、俗気を離れた「仙郷」の気分を楽しむことが目的であったと考えられる。

(6) 神社仏閣

神社仏閣は参詣の対象であり、名所案内記には縁起・由緒など多くの記述がみられるが、紀行文中の風景記述に関しては少なかった。風景記述は、天竜寺の「山門・法堂・廊下等往古の礎のみ残れり⁵⁶⁾」、「境内には檜と松の大木多し⁵⁷⁾」などの寺社仏閣の状態の記述や、臨川寺の「此寺景よく堺静なり、遊人もなし⁵⁸⁾」、「庭の築山、僧舎の景よし⁵⁹⁾」などの寺院と境内の景観に対する率直な印象の評価に限られた。



図-6 大堰川における三船遊「大井川舟遊図屏風」

4. 小倉山山裾部における風景記述の特徴

(1) 小倉山・山裾部の名所の特徴

嵯峨野についての一般的なイメージについては、近世の紀行文に、「凡嵯峨の地、古より隠士の盤旋せし所なり⁶⁰⁾」、「此野は古より閑静の地にして、古人も多くここに隠れ、秀詠の和歌多し⁶¹⁾」と書かれたように、都から隠れる場所として、また歌の名所として捉えられていた。同時代の名所案内記には、嵯峨へ隠棲した者として、兼明親王、西行や定家などの歌人、六条御息所や祇王などの物語の登場人物が挙げられている⁶²⁾。これらの隠棲地は、三方を山に圍繞された小倉山の山裾部に集中して分布している。

小倉山の山裾部には、『源氏物語』「賢木」の旧跡・野宮、『平家物語』「祇王」の旧跡・往生院（祇王寺）、藤原定家山荘の旧跡・時雨亭（二尊院、厭離庵、常寂光寺）などの著名な文学的旧跡が分布し、近世を通じて名所巡りが盛んであった。これらの名所の多くは、近世には藪・森の内にあった。野宮は「しけりたるもりの内に御みやあり⁶³⁾」、「前は天龍寺の藪、後も左右も山の腰にて藪なり⁶⁴⁾」とあり、祇王寺や落柿舎も「しげりたるやぶのうちに祇王寺あり⁶⁵⁾」、「さぎの落柿舎は、二尊院より四、五町間道藪の中にあり、土人も知らず⁶⁶⁾」と、ともに藪の内にあった記述がみられる（図-7）。また、それとは対照的に小倉山の山腹には、眺望の名所が生まれていた。

(2) 歌枕・四季の名所の風景

小倉山山裾部の名所においても、紀行文中の記述には、古歌の引用や歌に詠まれた景物が目立った。記述された景物には、野宮（詠手：源順、藤原公経、徽子女王）の時雨や雪、松風、小倉山・二尊院（同：定家、小倉公雄、藤原忠平）の軒端の松や紅葉、鹿の声、厭離庵（同：定家）の時雨や紅葉、などが代表的なものとして挙げられる（表-3）。時雨や雪などの気象現象を伴う景物については、歌の引用はみられるが、実際の体験としての記述に乏しかった。

人々の風景鑑賞の態度に着目して風景記述をみると、たとえば石出常軒は小倉山・二尊院を訪れ、古歌に詠まれた軒端の松や（色づいた）紅葉などの景物を探す、眼前に見出すことができなかったことを記した⁶⁷⁾。これは、文学に表現された見方で、風景を眺める習慣が非常に強かったことを示している。ただし、ここで常軒は、文学に表現された景物の代わりに、遅桜が散る様子を歌に詠んだ。一方で、陶真軒は、「定家卿の山荘のむかし朝な朝なと詠せられ、軒はの松そなれて久しき、など詠をかれしも情深く覚へ侍り。（中略）忍はれん軒はは見

へす小くら山ふりぬる松の残るあはれさ⁶⁹⁾」と詠み、眼前に古松を眺め、歌に詠まれた「あはれ深さ」を追体験したことが読みとれる。

「をぐらやま」の景物である紅葉に関して、近世の小倉山の植生についての記述をみると「小倉山におもむきて、麓の茶亭にしはしいこひてあふきみるに、山は皆楓の木どもいとおほし⁶⁹⁾」,「山々楓樹多し⁷⁰⁾」と、多くの楓の存在を示す記述がみられた。洛外図⁷¹⁾ (17世紀半ば)にも、小倉山の寺院周辺に紅葉が描かれていることが確認できた。

(3) 物語・故事の風景

紀行文中に引用された物語・故事に関する記述と、記述された鑑賞対象を抽出すると、野宮においては『源氏物語』「賢木」と、物語中に現れる黒木の鳥居、小柴垣、宮、森に関する記述がみられた。往生院(祇王寺)においては『平家物語』「祇王」,「横笛」と、その物語の舞台となる草庵、森、墓の記述がみられた。

人々の風景鑑賞の態度に着目して風景記述をみると、たとえば、『源氏物語』「賢木」の舞台となった野宮を訪れた陶真軒は、「誠によしあるさまにて、かたはかりなる小柴垣・黒木の鳥居も苔むし、いといと感情あまりあるまゝに、「野宮の余波もはかな小柴垣さすか残るもむかしへたてて」⁷²⁾と、「賢木」に表現された象徴的な景物を眼前に眺めながら、歌を詠んだ。旅人らは、物語の表現を通じて、旧跡の鳥居・柴垣や、その苔むした様から、物語のイメージを感じ取っている。

また、『平家物語』「祇王」の旧跡である往生院(祇王寺)を訪れた陶真軒は「もえ出るも枯るるもおなじ野辺のくさのみ生ひしけるふるつかとも、あはれもふかうおもひたとるに⁷³⁾」と記し、随筆家・津村淙庵は「彼よ

みける歌をおもひ出るに哀も一かたならず、かかる所におもひ入けんほともたくひなくおほゆ⁷⁴⁾」と記した。ここでは、物語の表現と眼前の景観とを重ね合わせ、「あはれ」を感じている。ほかの紀行文にもほぼ同様の記述がみられた。これらの名所では、物語で表現された景物や、物語のイメージと合致する物寂びた雰囲気をもった景観が評価された。

以上のように、これらの物語は虚構を含んでいるにもかかわらず、その舞台となった場所を訪れる人々の風景の見方に、大きな影響を与えていたことが読みとれる。

(4) 眺望

小倉山・山裾部において、眺望についての記述は、定家の旧跡の一つとされる二尊院(小倉山山上)内の時雨亭からの俯瞰景についてのみがみられた。時雨亭からは、「都のかた見えてよきところなり⁷⁵⁾」,「嵯峨野一円を眺望に備ふ⁷⁶⁾」,「目もはるけき山々面に書たらむかこく、えもいはぬけしきにまたなき心ちそせられける⁷⁷⁾」と、東山の連山、嵯峨野や都の眺めが評価された。東屋が設けられていたという記述も見られた⁷⁸⁾。前述した法輪寺、大悲閣とあわせて、俯瞰景を眺められた3つの視点場は、ともに寺院境内にあり、参拝と眺望の嘆賞が一体であったことが分かる。

(5) 神社仏閣

神社仏閣そのものについての記述がみられたのは、野宮の社、往生院の仏像と、厭離庵・常寂光寺の定家の旧跡・時雨亭であったが、その記述は他に比べて少なかった。たとえば、物語の旧跡でもある野宮は「野の宮とていとふりたる宮あり(中略)いと物さひたり⁷⁹⁾」と、その古風な様子が評価された。

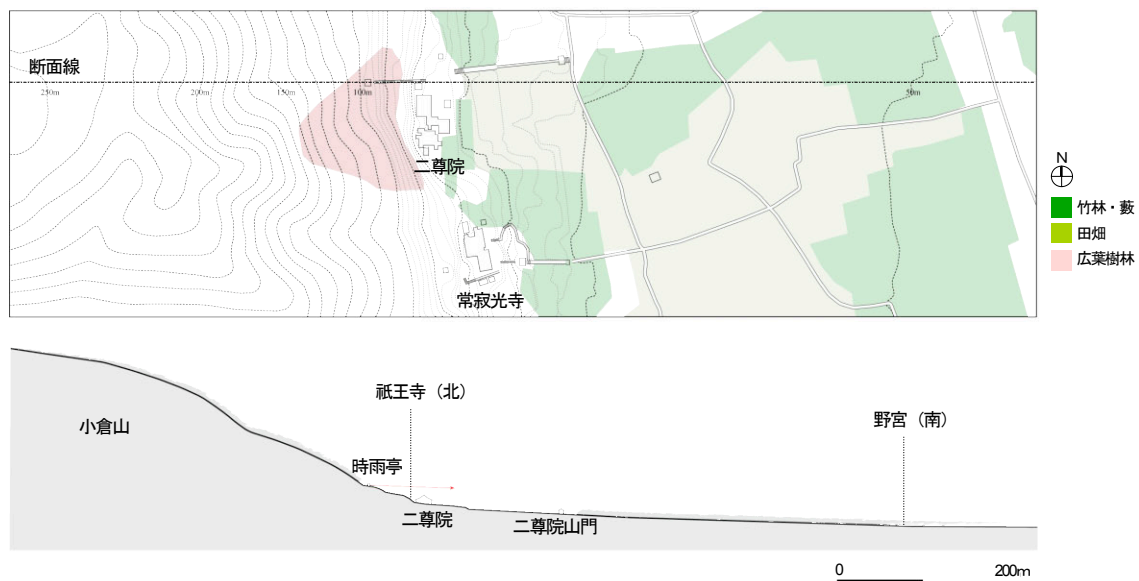


図-7 小倉山山裾部の断面構成(二尊院境内) (断面線は図-2 参照)

5. 北嵯峨における風景記述の特徴

(1) 北嵯峨の名所の特徴

三方を山並みによって圍繞されている北嵯峨一帯には田畠が広がり、その間に大沢池と広沢池が点在する。古くは大沢池は嵯峨院（後の大覚寺）の、広沢池は遍照寺の苑池とされ、ともに著名な歌枕であった。

(2) 歌枕・四季の名所の風景

紀行文中にみられた古歌と記述された景物を抽出すると、大沢池（藤原公任、赤染衛門、西行）の名古曾滝・菊か島が挙げられる。広沢池は月の名所としての記述はあるが、古歌の引用はみられなかった。

大沢池を訪れた石出常軒は、赤染衛門や西行の歌を引用し、彼らが「なかめし所なりければ、心とまりけれ⁸⁰⁾」と記しており、ここでも古歌に詠まれた風景を追体験しようとする態度がみられた。

広沢池は、『出来齊京土産』に「月の名所として、世の好事の人は明月にうそぶき、ここにまどひ来て興をもよをし。歌よみ。詩つくり酒のみうたふ⁸¹⁾」とあるように、歌を詠みに訪れる場所、詩作を通じて風景を楽しむ場所であった。詠歌の際には、広沢池の景物として広く定着していた月のイメージが強かったとみえ、『十国巡覧記』の筆者（末詳・諸国巡見使）のように広沢池を訪れたものの月が見えず、「今朝は月ならねとも霞にこめし旭の影、池にうつるふ紫微の雲、月の影とも見るべけれ⁸²⁾」と、見えない月の代わりに、旭の影・池に映る雲、を月の影として捉え、詠歌した。

(3) 眺望

北嵯峨における眺望についての記述は、広沢池の水面・周囲の山々・水鳥・池の汀の眺めについてみられた。広沢池からは、広々とした池の眺め⁸³⁾や、四方に望む山（遍照寺山・愛宕山・音戸山）の眺め⁸⁴⁾、また「池の辺も若草も下萌そむる糸遊に、つなぎ留たる春の色、まだ其儘（そのま）の長閑さに⁸⁵⁾」、「汀のまこもみとりにしけり、水鳥のをりあるこゑいとしつかに人気とをきさま、世々の人のめてつる名ところもけにたくひなくおほゆ⁸⁶⁾」というような、池辺と水鳥の長閑な風景を楽しんでいた記述がみられた。このように、月のイメージが強かった広沢池においても、視覚的な眺望を楽しんでいたことが読みとれる。視点場の記述については、『京童』（1658）に「まづ廣澤の月をみるには、池の西に居て東の山より出る月の、水にうつるをみる景、外よりすぐれ侍るなり⁸⁷⁾」という記述がみられた。この広沢池の畔には、「汀に茶屋あれば、やすらひつつなかむ⁸⁸⁾」、「堤なるかりやにて酒のむ⁸⁹⁾」というような、水辺で安

らぎながら酒を飲み風景を愛でる視点場（茶屋）が作られていた。これは『都名所図会』や、幕末の絵図『都百景⁹⁰⁾』からも確認できた。

6. 考察

(1) 近世の嵯峨野における風景鑑賞のあり方の特徴

前章までの考察の結果、嵯峨野の各領域に共通した風景の鑑賞のあり方の主なものとして、イメージの追体験、視覚的風景の観賞、遊びをともなう風景鑑賞、の3つがみられた。

a) 文学的イメージの追体験

歌枕・四季の名所の風景に関する記述からは、古歌の引用とそこに詠まれた景物の探索・鑑賞が目立ち、自らも詠歌して風景を鑑賞する態度がみられた。物語・故事の風景に関する記述からは、文学的イメージの追体験が目立ち、表現された景物を探索・鑑賞する態度がみられた。これらから、歌や物語などの文学に現れた風景表現や文学上のイメージが、その場所を訪れた人々の、風景に対する様々な解釈にはたらきかけていた、ことを読みとることができる。それは、近世以前の文学的表現が、近世以降には人々の風景鑑賞時の「見方」として定着していたとも言い換えられる。

このとき、虚構を多分に含んだ風景表現は、単なる文学上の表現としてではなく、現実の環境のなかで読み解かれ、追体験されることによって、現実の景観と結びつけられていた。

b) 視覚的風景の観賞

眺望に関する記述は、絶景の賞賛というかたちが目立った。嵐山では山の峰、松、桜と、嵐山の前を流れる大堰川の水の流れ、漁夫、千鳥ヶ淵の淵と岩、渡月橋を主な構成要素とする景観が賞賛された。その他、眺望を楽しむ視点場には広沢池の堤があり、そこからは周囲の山並み、水面の広がり、汀、水鳥が賞賛された。また、俯瞰を楽しむ視点場として、法輪寺や大悲閣、二尊院があり、法輪寺からは双岡や大堰川、二本の橋の景観が賞賛され、二尊院の山上からは東山の連山や都の俯瞰景が賞賛された。

c) 遊びをともなう風景鑑賞

遊びに関する記述は、嵐山に面した大堰川の川岸での飲食をともなう眺望の嘆賞のほか、川での魚捕り、舟遊びについてみられ、俗気を離れた仙境の気分を楽しむ態度がみられた。船遊びについては故事を模した遊びがみられた。

(2) 領域ごとの風景鑑賞のあり方の特徴

a) 嵐山周辺における特徴

嵐山周辺においては、歌枕である嵐山と大堰川、大堰川沿いの物語の旧跡において、歌や物語のイメージを眼前の景観に重ねる風景鑑賞のあり方がみられたのに加えて、大堰川沿いの茶店や川辺、水上、寺の境内などの複数の視点場からの眺望の嘆賞、大堰川周辺での様々な遊びをともなう風景鑑賞のあり方がみられた。近世の嵐山周辺においては、多様な風景が非常に密度高く、重層的に存在しており、それぞれの風景の鑑賞のあり方も異なっていた。

b) 小倉山・山裾部における特徴

小倉山・山裾部においては、小倉山や野宮に代表されるように、歌枕・四季の名所において、古歌のイメージ、特に紅葉や、時雨、雪などの晩秋から冬にかけての景物の探索・鑑賞が目立った。また、嵯峨野を舞台とする賢木や祇王、横笛などの悲恋の物語のイメージに対して、人々は眼前の景観を重ね、もの寂びた風景を鑑賞する態度がみられた。小倉山裾部の名所においては、嵐山周辺とは異なり、山や藪によって囲繞されるという景観の特徴が、寂びやあはれ深さの感受に関わっていたと考えられる。

c) 北嵯峨における特徴

北嵯峨の大沢池と広沢池の2つの名所では、歌のけい物の探索・鑑賞がみられたのに加え、周囲の山や長閑な野の眺望に対して視覚的な満足を得ていたことが分かった。

(3) 近世の嵯峨野における風景の重層性

嵯峨野の領域ごとの、風景記述の特徴を比較すると(図-3 参照)、眺望性にすぐれた嵐山周辺では、視覚的風景の観賞や遊びの記述が目立ったのに対して、山と藪に囲繞され、文学的名所が数多くみられた小倉山山裾部では、文学的イメージの追体験に関する記述が目立った。このような領域ごとに差異が見えるのに加えて、一つの場所においても、イメージの追体験や視覚的風景の観賞、遊び等の様々な風景鑑賞のあり方が重層的に生まれていた。なかでも特に文学的イメージの追体験が、風景の多様性を生んでいた背景には、文学的イメージが時代をこえて継承されていたことに加えて、それに合致する実際の景観が残されていたことがあった。

すなわち、近世の嵯峨野における風景の重層性は、山や川、池などの地形条件等による景観の多様性と、名所の成立背景の多様性、文芸に現れた様々な風景表現の時代をこえた継承と、それらのイメージに合致した景観の状態に要因があった。

7. 結論

本研究は、近世の嵯峨野を対象として、22編の紀行文にみられる風景記述の分析を通じて、1) 風景の鑑賞対象、2) 風景鑑賞時に想起されている過去の風景表現やイメージ、3) 風景鑑賞時の主体の態度や行為、得た印象、を把握することで、嵯峨野における多様な風景鑑賞のあり方を明らかにした。具体的には、近世の紀行文にみる風景記述を、鑑賞対象およびそれに関連するイメージの性質により、歌枕・四季の名所の風景、物語・故事の風景、眺望、遊び、神社仏閣に分類し、それぞれについて人々の風景鑑賞のあり方の特徴を明らかにした。その結果、嵯峨野全体に共通してみられた風景の鑑賞のあり方の、主なものとして、イメージの追体験、視覚的風景の観賞、遊びをともなう風景鑑賞、の3つがみられたことを示し、1) 歌枕・四季の名所の風景に関しては、古歌の引用とそこに詠まれた景物の探索・鑑賞が目立ち、自らも詠歌して風景を鑑賞する態度がみられたこと、2) 物語・故事の風景に関しては、文学的イメージの享受や追体験が目立ち、表現された景物を探索・鑑賞する態度がみられたこと、3) 眺望に関しては絶景の賞賛をともなう視覚的風景の観賞が多くみられ、嵐山に面した大井川の川岸や川上のほか、法輪寺や二尊院などの山上、広沢池の堤などが眺望を楽しむ視点場として挙げられたこと、4) 遊びに関しては、嵐山、大堰川における仙境の疑似体験や故事を模した遊びがみられたこと、5) 神社仏閣に関する風景記述は少なかったこと、をそれぞれ示した。また、嵯峨野の領域ごとに風景鑑賞のあり方に差異がみられたことを示した。以上の考察を通じて、本研究は、近世の嵯峨野において、様々な風景が重層的に生まれていたことを示した。

謝辞：本研究は日本学術振興会、特別研究員奨励費20-5405の助成を受けたものである。

補注

- (1) 奥野は、人が環境の中の対象を風景として眺める際の、「視覚による環境認知の方向性」と「情報を受け入れるための枠組み(型)」の両者を、風景の「見かた」としている(参考文献 23, pp.24)。本論では、前者の、人間が環境から情報を抽出、解釈するあり方に着目し、それを風景の「見方」とする。
- (2) 嵯峨野には近世寺檀制度の頂点をなす大本山寺院が点在しており、全国からの本山参りの人々が来集した(参考文献 1, pp.43)。
- (3) 奥野は、日本においては「記紀、万葉、王朝物語の風景が、それにちなむ歌枕などの言葉、表現がやはり美の典型として、江戸時代、明治時代まで受け継がれ」と指摘する(参考文献 24, pp.191)。
- (4) 嵐山の風景上の特徴に関する主要な記述について、以下に原文を引用する。

「嵐ノ山、甚ダ高カラズ、遠クシテ之ヲ望メバ、窈乎トシテ雲霧ヲ食ヘルノ人ノ如ク、近クシテ之ヲ視レバ、温乎トシテ醇醪ニ酔ヘルノ人ノ如シ、京ヲ去ルコト甚ダ遠カラズ、而シテ甚ダ遠キニ似タリ、地幽ナレバナリ」
「松有リテ蔭シ、桜有リテ映ジ、泉有リテ瀉ギ、石有リテ削リ、寺閣倚リ、樵路廻ル、還ラスニ大堰ノ水ヲ以テシ、横フルニ渡月ノ橋ヲ以テス、屹然トシテ煙霞吞吐ノ間ニ出ヅルモノヲ香雲樓ト為ス、三軒ノ館、七老ノ亭、山ニ傍ヒ、水ニ枕ミ、或ハ高く、或ハ低ク、煙欄虚ニ架シ、霞檻鏡ニ映ズ、鏡花水月、恍トシテ夢寐ノ如シ、欲界ノ仙都ト謂フベシ矣」
(参考文献26)

- (5) 平安時代の和歌を採録した『平安和歌歌枕地名索引』による。同書に採録された嵯峨野の歌枕とその景物を整理した結果、「をぐらやま」を詠んだ119首のうち31首が、「あらしやま」を詠んだ51首のうち24首と半数近くが「もみぢ」を詠むなど、詠まれた景物は紅葉が最も多く、他に月や鹿、女郎花などの秋の景物、露や時雨などの冬の景物、霧や霞、時雨、風、雲、雪などの気象現象がみられた。また、同書には嵐山について詠んだ51首のうち、桜について詠んだ歌はみられなかった。(ひめまつり会編著：平安和歌歌枕地名索引、大学堂書店、1972.)
- (6) 延喜7年(907)の宇多法皇の御幸の際に、作詩、管弦、和歌の舟を浮かべて詩歌管弦の遊びをしたが、これが三船の遊びの始まりと伝えられている。これが後に慣習化され、一条院と藤原道長が1016年頃にここで詩歌管弦の三船遊びをし、また白河天皇が承保3年(1076)に三船の遊びを行ったとされる。(嵯峨教育振興会編：嵯峨誌 平成版、pp.464, 嵯峨教育振興会、1998.)
- 皆川淇園らのほか、南画家・日根野対山や中島棕隠らが、嘉永6年(1853)の花時に四隻の船(詩歌船、書画船、管絃船、酒船)を仕立て大堰川に遊んでいる。(生田耕作、坂井輝久：洛中洛外漢詩紀行、pp.21, 人文書院、1994.)

参考文献

- 1) 京都市編：史料京都の歴史 右京区 14巻、pp.43, 平凡社、1979.
- 2) 駒敏郎、村井康彦、森谷尠久編：史料京都見聞記 第一巻～第三巻、法蔵館、1991.
- 3) 西嶋啓一郎、仲間浩一：江戸時代の朝鮮通信使による風景認識と体験記述の特徴に関する研究、ランドスケープ研究、Vol.62, No.5, pp.673-676, 1999.
- 4) 吉村晶子：「東関紀行」の分析を通じた動態的風景記述モデルの構築、ランドスケープ研究、Vol.61, No.5, pp.675-680, 1998.
- 5) 馬木知子：名所本にみる近代東京の都市風景の変容について、ランドスケープ研究、Vol.67, No.5, pp.623-628, 2004.
- 6) 西田正憲：瀬戸内海の近代的風景の発見と定着－風景観の変遷過程に関する研究－、京都大学学位論文、1996.
- 7) 岡野祥一、十代田朗、羽生冬佳：名所本にみる江戸期を通じた近郊名所の変遷に関する研究、ランドスケープ研究、Vol.65, No.5, pp.797-800, 2002.
- 8) 出村嘉史、大住由布子、川崎雅史、樋口忠彦：本居宣長『在京日記』にみる行楽地としての東山景域の構成、土木学会論文集D, Vol.63, No.2, pp.158-168, 2007.
- 9) 小野佐和子：江戸郊外の遊覧地、造園雑誌、Vol.46, No.4, pp.235-250, 1983.
- 10) 鈴木章生：江戸の名所と都市文化、吉川弘文館、2001.
- 11) 菅井聡子：江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間・類型化と編纂史の分析を通して、地域と環境2, pp.29-39, 1999.
- 12) 山近博義：近世名所案内記類の特性に関する覚書－「京都もの」を中心に、地理学報、Vol.34, pp.95-106, 1999.
- 13) 保存修景計画研究会：保存修景計画への試論－嵯峨野、都市住宅、第40号、1971年8月号、1971.
- 14) 土屋敦夫：嵯峨野の歴史的風土と町なみの形成；京都市都市計画局風致課編：嵯峨野鳥居本町なみ調査報告、1976.
- 15) 山崎正史：京の都市意匠－景觀形成の伝統－、プロセスアーキテクチャ、1994.
- 16) 山崎正史、曾野泰行：環境シンボルとしての環境意匠に関する研究、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp.465-468, 1986.
- 17) 山口敬太、出村嘉史、川崎雅史、樋口忠彦：嵯峨野の名所再興にみる景觀資産の創造と継承に関する研究－祇王寺、落柿舎、厭離庵の再興事例を通して－、土木計画学研究・論文集、No.24, 2007.
- 18) 山口敬太、水谷肇、出村嘉史、川崎雅史、樋口忠彦：昭和初期の嵯峨における風景の価値評価に関する研究、景觀・デザイン研究論文集、No.1, pp.185-192, 2006.
- 19) 実測大絵図、1701、慶長昭和京都地図集成、柏書房、1994.
- 20) 洛外図、17世紀；京都国立博物館編：洛中洛外図 都の形象・洛中洛外の世界、pp.277, 淡交社、1997.
- 21) 大日本帝国陸地測量部：1:20,000 仮製地形図、明治22年測量明治25年製版.
- 22) 樋口忠彦：風景と型；日本の美学編集委員会：日本の美学 13号 型、ペリかん社、1989.
- 23) 阿部一：日本空間の誕生、せりか書房、1995.
- 24) 奥野健男：文学における原風景、pp.191-195, 集英社、1989.
- 25) 羽生冬佳：江戸の名所の成立・成熟過程に関する研究、都市計画論文集、Vol.39, pp.115-120, 2004.
- 26) 仁科幹輔評：嵐山風雅集、出版者不明、1839.
- 27) 西沢一鳳軒：綺語文章、1850；前掲 史料京都見聞記 3, pp.264.
- 28) 未詳：嵯峨野眺望、1760；前掲 史料京都見聞記 2, pp.61.
- 29) 石出常軒：所歴日記、1664；前掲 史料京都見聞記 1, pp.21.
- 30) 前掲 29, 所歴日記, pp.21.
- 31) 前掲 29, 所歴日記, pp.21.
- 32) 未詳：京師順見記 下嵯峨筋巡見、1767；前掲 史料京都見聞記 2, pp.211.
- 33) 未詳：十国巡覧記、1838；前掲 史料京都見聞記 3, pp.156.
- 34) 西沢一鳳軒：綺語文章、1850；前掲 史料京都見聞記 3, pp.264.
- 35) 前掲 33, 十国巡覧記, pp.156.
- 36) 百井塘雨編：笈埃隨筆、1804頃；前掲 史料京都見聞記 第四巻, pp.379.
- 37) 木内啓胤：たびまくら、1839；前掲 史料京都見聞記 3, pp.199.
- 38) 大槻磐溪：西游紀程、1817；前掲 史料京都見聞記 3, pp.76.
- 39) 前掲 38, 西游紀程, pp.75.
- 40) 前掲 33, 十国巡覧記, pp.156.
- 41) 谷重遠：東遊草、1704；前掲 史料京都見聞記 1, pp.252.
- 42) 前掲 41, 東遊草, pp.252.
- 43) 中島広足：花のしふたし、1858；前掲 史料京都見聞記 3, pp.343.
- 44) 吉村静軒：旅のおぼえ、1831；前掲 史料京都見聞記 3, pp.81.
- 45) 前掲 43, 花のしふたし, pp.343.
- 46) 徳川美術館編：桃山・江戸絵画の美、徳川美術館、2008.
- 47) 前掲 32, 京師順見記 下嵯峨筋巡見, pp.213.
- 48) 前掲 32, 京師順見記 下嵯峨筋巡見, pp.210.

- 49) 黒川道祐：嵯峨行程 近畿歴覧記，1680；前掲 史料京都見聞記 1，pp.56.
- 50) 前掲 41，東遊草，pp.252.
- 51) 清河八郎：西遊草，1855；前掲 史料京都見聞記 3，pp.324.
- 52) 富本繁太夫：筆満可勢，1835；前掲 史料京都見聞記 3，pp.94.
- 53) 皆川淇園：三舫詩序，1798；嵯峨教育振興会編：嵯峨誌 平成版，pp.464，嵯峨教育振興会，1998.
- 54) 伊藤宗裕構成：京都古地図散歩，別冊太陽 86，pp.141，平凡社，1994.
- 55) 前掲 51，西遊草，pp.324.
- 56) 前掲 32，京師順見記，pp.212.
- 57) 前掲 37，たびまくら，pp.201.
- 58) 前掲 41，東遊草，pp.252.
- 59) 前掲 33，十国巡覧記，pp.156.
- 60) 前掲 49，嵯峨行程，pp.49.
- 61) 前掲 33，十国巡覧記，pp.159.
- 62) 秋里籬島：都名所図会，1780，竹村俊則校訂，新版都名所図会，角川書店，1999.
- 63) 未詳：千種日記，1683；前掲 史料京都見聞記 1，pp.135.
- 64) 前掲 32，京師順見記，pp.213.
- 65) 前掲 63，千種日記，pp.134.
- 66) 滝沢馬琴：羈旅漫録，1802；前掲 史料京都見聞記 2，pp.237.
- 67) 前掲 29，所歴日記，pp.19.
- 68) 陶真軒：嵯峨道之記，1688-1704；前掲 史料京都見聞記 1，pp.243.
- 69) 横山桂子：露の朝顔，1840-1850；前掲 史料京都見聞記 3，pp.224.
- 70) 前掲 41，東遊草，pp.253.
- 71) 前掲 20，洛外図
- 72) 前掲 68，嵯峨道之記，pp.243.
- 73) 前掲 63，千種日記，pp.134.
- 74) 津村涼庵：思出草，1792；前掲 史料京都見聞記 2，pp.360.
- 75) 前掲 74，思出草，pp.341.
- 76) 前掲 33，十国巡覧記，pp.157.
- 77) 前掲 69，露の朝顔，pp.225.
- 78) 前掲 33，十国巡覧記，pp.157.
- 79) 前掲 69，露の朝顔，pp.226.
- 80) 前掲 29，所歴日記，pp.19.
- 81) 浅井了意：出来齊京土産，1677；野間光辰編：新修京都叢書 vol.11，pp.604，臨川書店，1994.
- 82) 前掲 33，十国巡覧記，pp.158.
- 83) 前掲 29，所歴日記，pp.24.
- 84) 前掲 74，思出草，pp.341.
- 85) 前掲 33，十国巡覧記，pp.158.
- 86) 前掲 74，思出草，pp.341.
- 87) 中川喜雲，浅井了意著：京童，1658；新修京都叢書 vol.1，臨川書店，1993.
- 88) 前掲 74，思出草，pp.341.
- 89) 中島広足：雲廼古呂母，1860；前掲 史料京都見聞記 3，pp.359.
- 90) 都百景，1860年頃；中川邦昭写真・文：都百景 彩色木版画集，京都新聞社，1994.

(2008. 11. 4 受付)

THE SCENIC DIVERSITY OF SAGANO DESCRIBED IN TRAVELOGUES DURING EDO ERA

Keita YAMAGUCHI, Yoshifumi DEMURA,
Masashi KAWASAKI and Tadahiko HIGUCHI

This paper discusses the wide variety of ways of appreciating the scenery of Sagano, by analyzing descriptions of travelogues during Edo era. Firstly, we understand what travelogue writers saw and thought, and behaved in Sagano. Secondly, we examine the ways of appreciating the scenery -the scenery of famous places for poetic and literary sites, the prospect, the pleasure, the scenery of temples and shrines-, and explain the diversity of appreciating the scenery as enjoying the visual landscape, reliving historical and literary images, behaving like a mountain hermits, and so on. Finally, we consider the scenic diversity of Sagano was caused not only by the variety of the physical environment, but the variety of ways of appreciating the scenery, and the status of the actual visual landscape which corresponds with the historical and literary images.